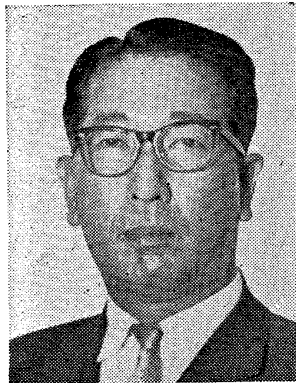


随 想

第 66 回講演大会について

武 田 喜 三*



去る10月18日より20日まで3日間に亘り、名古屋大学において第66回日本鉄鋼協会講演大会が日本金属学会とともに開催されたが、折柄秋日和の好天氣に恵まれ非常に盛会であつた。

毎年春秋2回に亘つて開催される講演大会は、当協会の事業活動のうち、本年1月より当協会の運営に移行された日本鉄鋼協会共同研究会の推進とともに重要な行事であり、幸い実行委員各位の御努力で年々盛大、かつ充実しつつあることはまことに同慶に堪えないところである。

今大会においても、企画面および実行面で、各実行委員の努力のあとが多々見受けられ、出席者の一人として力強く感じさせられた。

今回は、丁度、西独、マックスプランク金属研究所長ヴェルナー、ケスター博士 (Dr. Werner Köster) 夫妻を迎え、第1日目午前中に、名誉会員推挙式が名古屋大学豊田講堂にて行なわれ、三島日本鉄鋼協会々長および佐藤日本金属学会々長から、それぞれケスター博士の業績紹介、名誉会員推挙、引き続き同博士の「金属および合金の微細組織の研究に関する方法」と題する記念講演があり、大会の雰囲気を一層盛り上げるものとした。

今大会で、もう一つ成功だつたのは、「純酸素転炉による高炭素鋼の溶製について」をテーマとした第2回パネル討論会が、同日午後、約4時間に亘つて行なわれたことである。第1回は昨秋広島大学の第64回講演大会で、「鋼中非金属介在物研究の問題点」をテーマとして行なわれ、これもまた非常に盛会であつたが、その時は残念ながら会場が狭く収容しきれない程であつた。今回、会場として選定された豊田講堂は、広さといい、雰囲気といい申し分なかつた。講演者5名に対して討論参加者11名、活発な討論があつたが、時間が不足で、もう1時間程欲しい感じであつた。質問者も中にはやや固くなられたむきもあつたが、皆さんなかなか準備もよく、熱心で、転炉についての討論としては立派だつたと思う。協会編集委員会のテーマの採り上げ方、ならびに大会の諸準備を担当された幹事の方々、司会者および関係者に敬意を表する次第である。また、従来、あまり対外的に発表されなかつた転炉の作業、とくに高炭素鋼の溶製法、脱燐などについて、会社から積極的に発表されたことについては、世界の純酸素転炉の尖端を行くわが国においては当然といえそれまでであるが、なお一層の発展を期するためには是非とも必要であり、良い機会であつたと思う。このパネル討論会は、当協会の講演大会での代表的行事として是非今後も続けて戴きたいと思う次第である。その場合、討論参加者以外の大会参加者からも質疑応答ができ得るよう時間的配慮ができれば、さらに有意義な討論会になるのではなからうか。

つぎに、第1日目の夕、ホテル・ニューナゴヤにおいて、地元の御後援を得て懇親会が両学協会共催で行なわれたが、これもまた盛大であつた。ただ欲をいえば、大会出席の若い方々も是非出席して懇談に参加して欲しいものである。

* 本会副会長 八幡製鉄株式会社常務取締役

若い方々が関心を持たれる鉄鋼協会の総会であり、大会であらねばならないし、われわれ協会役員としても運営上考えねばならぬことであろうと思う。

第2日目の午前中に行なわれた共同研究会部会報告講演会も、当協会の研究部門の活動状況の一端を知つて戴く意味でも、是非とも存続して行きたいものである。

第2日目の午後より1日半に亘つて行なわれた学術講演会については、これまた盛況で、講演件数も201件に達し、内容的にもかなり開発的なテーマも含まれ、わが国鉄鋼技術の進展に寄与するところ多大なものがあると信ずる。ただ、会場の都合上やむを得ない点もあるであろうが、講演各部門と会場広さとのバランスの問題、および最近とくに増加してきた幻燈による説明図表の利用についても、より効果的にするために十分な配慮が必要であろうと思う。

最後に、大会前に配布される「講演大要号」の点であるが、すでに会誌の本年第10号（9月号）の会告に見られるように、編集委員会において種々検討された結果、来春の第67回講演大会より名称も「講演大会論文集」と改められ、現寄稿規程の制限枚数をさらに増加し、内容的にさらに充実したものになる筈であり、今後の講演大会に大いに貢献することであろう。あえて一言触れた次第である。

以上、第66回講演大会に出席して気付いた点について1, 2述べさせて戴いたわけであるが、今後益々有意義な講演大会となるよう協会側としても充分意を尽して行くとともに、会員各位の絶大なる御支援を得たい所存である。